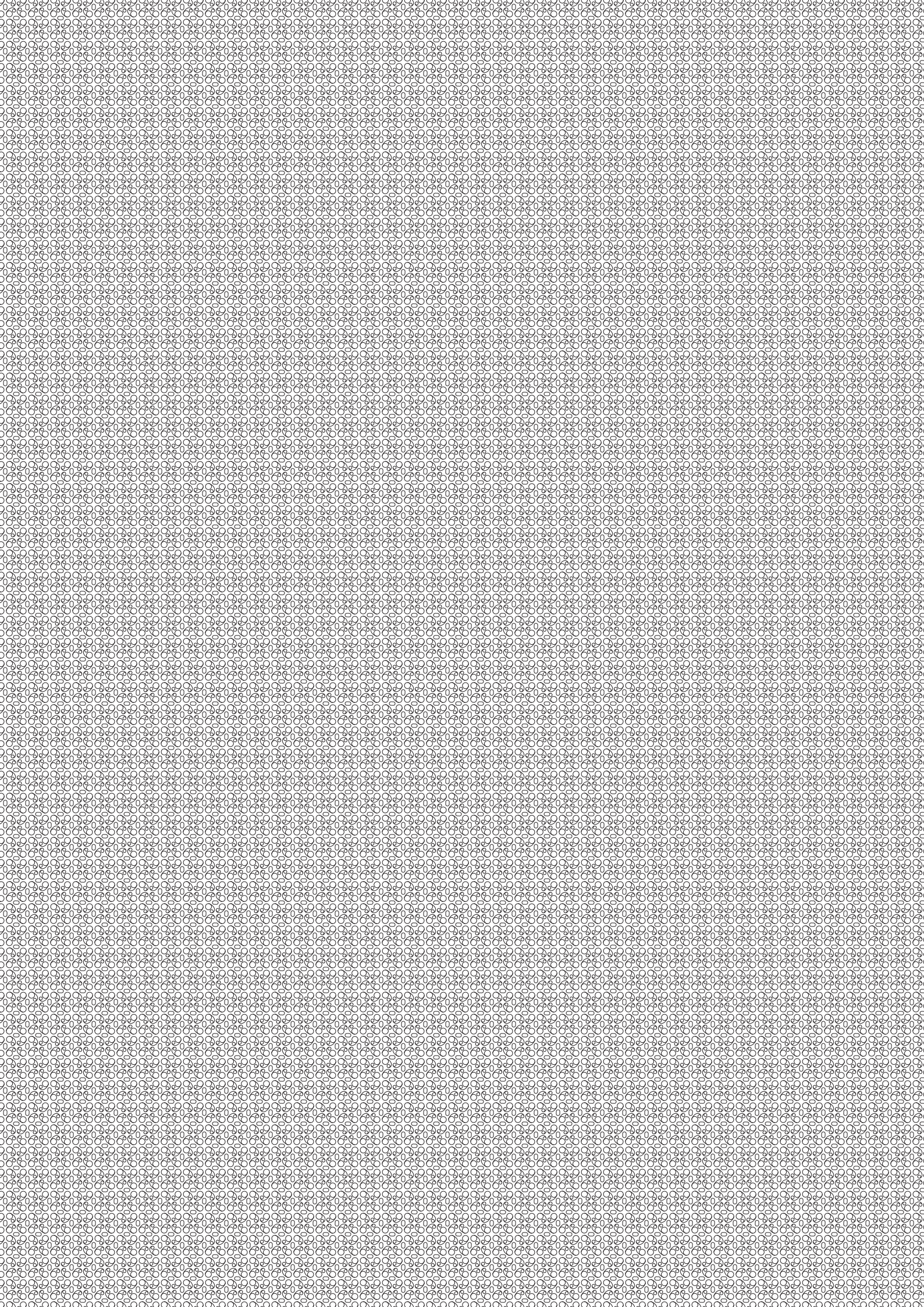


国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、17 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や**。**や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を**正確に塗りつぶしなさい。**
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 専門家が推奨している製品を買う。
- (2) 評判のよい銘柄の品を買う。
- (3) 資料を謄写する。
- (4) あの人の発言は何か魂胆があつてのことだろう。
- (5) 諸般の事情により会の開催を延期する。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 式典で来賓がシユクジを述べる。
- (2) 市民から情報をテイキヨウしてもらう。
- (3) 相手企業とのシヨウダンをまとめる。
- (4) 日が暮れて、イエジを急ぐ。
- (5) 今回の活躍で前回の失敗はチヨウケしだ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「おじいちゃん」は仕事を引退したが、趣味もなく家にこもることが多くなった。ある日、「おばあちゃん」の代理として町内の役員会に出席した「おじいちゃん」は、他の町内でやっていないことで、町内の人々の交流を図る新規事業ができないものと提案した。

役員会を終えて公民館から出て来たおじいちゃんは、「さあ、これから地域興<sup>おこ</sup>しだ。」と笑いながら手もみした。「ちひろも手伝ってくれよな。」

「何をするの。」  
「実は、昨日散歩してたときに、あるものを見て、ちよつと考えたことがあつてね。」

おじいちゃんがもう一度そこへ行くというので、ちひろも同行することにした。

止まったブランコに乗ったままの女の子に「ばいばい。」と手を振ると、ちよつと寂しそうに手を振り返した。彼女のお母さんは、まだ携帯で誰かとおしゃべりをしていた。

それは十分ほど歩いたところにある住宅地にある家だった。ちひろがそれを見て「わ、すごい。」と漏らすと、おじいちゃんは「だろ。」と得意げに言った。

コンクリート塀に囲まれた二階建ての一軒家だった。家自体はよくある感じのものだったけれど、外観はとんでもなく違っていた。花に満ちていたのだ。

コンクリート塀にも家の外壁にも、たくさんの小さな陶製のプランターが針金を使ってぶら下げられてあった。それこそ所狭しという感じで、色とりどりの花たちが競い合うように、塀や壁を埋め尽くしている。チューリップ、すみれ、つつじ、バラ、スイートピー、マーガレットなど、ちひろが知っている花もあったが、知らない種類の方がはるかに多かった。

「いったい、プランターはいくつあるんだろうか。ちひろは指差して数え始めたが、途中で判<sup>わか</sup>らなくなった。」

「昨日、ここを通ったときに思ったんだ。うちの町内全体をこんな感じに花でいっぱいになったら、きつとすごいだろうなって。」

「町内の家を全部、こういうふうにするっていうこと?」

「うん。花で飾るってことだけが問題じゃないんだ。町内のみんなで力を合わせて、もつとこう、友達になるっていうか、さ。」

そんなの無理に決まってるじゃん、やりたがらない人だっているだろうし——と言いかけた言葉をちひろは飲み込んだ。今のおじいちゃんだったら、もしかしたら何とかするかもしれない。

「とりあえずは、この家の人から話を聞いてみようと思う。手入れ方法とか、どれぐらいの費用がかかったかってことなんかを知る必要があるからね。」

おじいちゃんはそう言うと、門扉<sup>もんび</sup>を開けて敷地内に入り、玄関のチャイムを鳴らした。表札には「木戸」とあった。

インターホンで「はい。」と、男の人の返事があった。

「あの、私、小野と申しまして、この近くに住んでおる者ですが、お宅様のお花のことについて、ちよつとご教示いただけませんかと思ひまして……。」

「お待ちください。」と答えてから出て来た木戸さんは、おじいちゃん

と同年代ぐらいの、四角い顔の人だった。体格がよくて、おじいちゃんより一回り大きく、顔もいかつい感じだった。

「突然お訪ねして申し訳ありません。」

おじいちゃんは頭を下げてから、自分の名前や住所を言い、ちひろのことも孫娘だと紹介してから、自分の町内をできればこういうふうの花でいっぱいに行きたらと考えているので、手入れや費用、プランターを吊り下げるやり方などを教えていただけませんかでしょうか、と頼んだ。<sup>(2)</sup> 木戸さんは口をぽかんと開けて聞いた後、苦笑しながら舌打ちをした。

「小野さん、とおっしゃいましたよね。」

「はい。」

「花を育てた経験はありますか。」

「いいえ、全くの素人<sup>しろうと</sup>です……。」

「やっぱりね。」木戸さんは意味ありげにうなずいた。「これだけの花を育てるには、それだけの知識と手間と、かなりの費用が必要なんです。種まきの時期もそれぞれ違いますし、花ごとに適した土を選んで、壁にかかっているやつなんかは、はしごに登って毎日水をやらなきゃならないんです。花好きの人が自分の家もこういうふうにしてみたいというのなら判りますが、町内の方々にも同じことをやれと強要できるもんじゃな

いと思いますよ。」

「はあ……。」  
「そりゃあ、町内全体がこんなふうになれば、すごいことですよ。街中の評判になるでしょうし、たくさんの人が見に来て、にぎわうかもしれない。でも、現実問題として無理ですよ、それは。花のことをよくご存じない方ならではの面白い発想ではあるけれど、とても実現可能なことだとは思えませんね。」

「……そうですか。」

木戸さんは、ちょっと言い過ぎたようでも、ちひろを見て苦笑してから、「きつい言い方をしてすみません。まあ、花のことで聞きたいことがあれば、いつでもお教えしますので。」とつけ加えた。

帰り道、おじいちゃんはずっと黙り込んでいた。ちひろもかけるべき言葉が見つからず、おじいちゃんの背中を見ながら歩いた。

<sup>(3)</sup> 家が近づいてきたところでおじいちゃんがぼつりと言った。

「でも何とかしたいんだよね、殺風景なこの町内を。」  
おじいちゃんは、まだへこたれてなかったらしい。ちひろは少しだけほっとした。

と黙っていると、おじいちゃんはさらに続けた。

「うん、木戸さんちの真似<sup>まね</sup>をする必要はないんだ。やりようによっては何とかなるはずだ。な、ちひろ。」

ちひろは条件反射的に「うん。」と答えたが、そんな方法があるものだろうか、心の中で首をかしげた。

帰宅したおじいちゃんは、すぐにパソコンを立ち上げてインターネットを使って調べものを始めた。ちひろが覗き込むとおじいちゃんは、「手間や費用をかけないで町内を花いっぱいにする方法を調べるんだ。」と説明した。

「あるといいね。」

「あるさ。木戸さんは、知識と手間と費用が必要だって言ったけど、それはあの人ちみために、いろんな種類の花を飾るからだろう。知識なんかなくっても、手間や費用をあんまりかけなくても育つ花を選べばいいんじゃないかと考えたわけだよ、俺は。」

ちひろはそれを聞いて、何気なく「あさがおとか？」と聞いた。

キーボードを操作していたおじいちゃんの手が止まった。

「あさがおか。あさがおは手間がかからないのか。」

「多分。小学一年生の理科で、一人一鉢育てるぐらいだから、丈夫な植物なんだと思うよ。水だけやっつけばちゃんと育ったっていう感じだったし。」

「ほう。」

「私んちの近所の公園なんか、勝手にあさがおが伸びて、またその種が落ちて、次の年はさらに増えてって感じで、去年なんか金網にあさがおがいつぱいからまつたし。」

「つまり、デリケートじゃない、タフな植物だから、ほとんど何もしなくともいいわけか。」

「多分。それに、あさがおだったら今が種まきどきだよ。花は七月から十月か十一月ぐらいまで咲いてるし。」

「あさがおか……。」

おじいちゃんはインターネットであさがおのことをいろいろと調べた。結果、ちひろが言ったとおり、育てるのに手間や費用がかからないということが判った。

「おじいちゃん、いいじゃないの、あさがお。木戸さんちみたいにプランターを壁にかけたりしなくても、あさがおだったら勝手に伸びてくから、上から網を吊しとくだけでいいし。」

「なるほど。悪くないな。最初はひまわりにしようと思ったけれど、ありがちな。」おじいちゃんは自分のあごをなでた。「あさがおとなると、下に置くプランターと土と、網の費用だな、問題は。土はその辺の土でもちゃんと育つみたいだから、ご近所に協力してもらえば何とかなるかもしれないけど、プランターと網は買わなきゃな。」

「百円ショップにあるよ。」

「うそ。」

「あるって。うちのお母さんが家庭菜園とかで買うから。」

「家庭菜園って、ちひろんちはマンションじゃないか。」

「ベランダだよ、ベランダ。百円ショップで買ったプランターを置いてプチトマトとか育ててるの。網はね、ハトヤカラスよけのために張るの。」

「へえ。」おじいちゃんは感心した様子だった。「そしたら、案外安く上がりそうだな。」

「だね。」

でも、おじいちゃんはしばらく考えるような顔で黙り込んでから、「あさがおは、朝しか咲かないんだろ。」と言った。

「そりゃそうだよ、だからあさがお。昼に咲くのはひるがおっていう別の種類の花だし、夕方はゆうがお。」

おじいちゃんは突然、両手をぱんと叩いた。

<sup>(4)</sup> ゆうがおだ、ゆうがお。

「どうして。」

「朝はみんな、仕事とか学校だとかに出かけるから、花が咲いても見る余裕がないだろ。でもゆうがおならそんなことないじゃないか。」

「あー、そうかもね。」

「ちょっと想像してみろよ、ちひろ。仕事とか学校からみんなが帰ってくる、な。そして自分の町内に入るとだ、そこらじゅうにゆうがおが咲いてるんだ。」

ちひろはそのさまを頭の中に描いてみた。

夕食前に、ゆうがおに水をやっているおばさん。青々としたゆうがおのつるや葉が、塀や家の壁を覆っている。葉にかかった水滴が暮れなずむ夕陽の光を受けてきらきらしている。近所の人同士が、互いの家のゆ

うがおの色や立派さをほめ合っている。遊びから帰って来た子、塾から帰って来た子、部活を終えて帰って来た子たち、それに仕事帰りのおじさんおばさんたちを、ゆうがおの花が迎える。ゆうがおは言葉を話せないけれど、咲いているだけで「おかえり」って言ってるみたいに見える。「いいね、ゆうがお。あさがおよりゆうがおかもね。」

「だろ。」

「カラスが鳴くから帰るんじゃないかって、ゆうがおが咲くから帰るわけね。」

「そうそう。」

ゆうがおなら何とかなりそう。ちひろもちょっと、わくわくした気分になってきた。

夕食後、おじいちゃんはソファに身を沈めてテレビを見ているうちに、小さないびきをかき始めた。おばあちゃんは「暗くなるまで遊び回っていた子供の頃に逆戻りしたみたいね。」と苦笑しながら毛布をそっとかけた。

(山本甲士「わらの人」による)

〔注〕女の子——公民館の前にある公園で、おじいちゃんを待っていたちひろが遊び相手をした子。

〔問1〕<sup>(1)</sup> おじいちゃんは「だろ。」と、得意げに言った。とあるが、この

ときのおじいちゃんの様子を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 散歩で偶然見つけた花に囲まれた家の美しさを、ちひろには黙っていることができなくなり、連れてきて一緒に見ることができてはしゃいでいる。

イ 地域興しのための手がかりになると思っている、自分が心引かれた花に囲まれた家のすばらしさが、ちひろにも理解されたと思って気をよくしている。

ウ 花に囲まれた家の美しさにちひろも驚いたと思い、この家を真似すれば地域興しはきっと成功するので、必ず手伝いをするようにと念を押している。

エ ちひろに見てもらおうと花に囲まれた家に連れてきたところ、彼女が思いのほか感激したため、自分にはいいものを見る目があるだろうと威張っている。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 木戸さんは口をぽかんと開けて聞いた後、苦笑しながら舌打ちを

した。とあるが、木戸さんがこのような態度を取ったのはなぜか。

その理由として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 見ず知らずの人が突然訪問してきて、花を使った壮大な構想を聞かされたが、その内容からこの人は花のことを何も知らずに計画していると思ひ、あきれて気を悪くしたから。

イ 家の花に一目置いてくれて、自分と同じ趣味の人が花について聞いたことと訪ねてきたのかと期待したが、花のことを知らない人が無理難題を言いに来たことを知って失望したから。

ウ 花のことを聞きに突然やってきた人の話などは初めは聞く気もなかったが、その人は花を大切にしような人ではないことが次第に分かってきて、余計に腹立たしくなったから。

エ 訪ねてきた人は町内のためだと言うが、その話は信じられず、自分が今まで苦心してきた技術を、花作りに無知な人が盗もうと思っていないのではないかと疑って軽蔑したから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 「でも何とかしたいんだよな、殺風景なこの町内を。」とあるが、

おじいちゃんは町の理想を抱いていたが、木戸さんから真つ向から否定されてしまった。おじいちゃんの理想と、それとは対照的な木

戸さんの考えを次のようにまとめるとき、 A  B

に当てはまる最も適切な言葉を、それぞれ本文中から、 A

は十三字、 B は二十六字で探し、そのまま抜き出して書

け。

おじいちゃんは、 A 町興しをしたいと思っているが、木戸さんは、 B と考えている。



〔問4〕<sup>(4)</sup>「ゆうがおだ、ゆうがお。」とあるが、この発言はおじいちゃん

どのような気持ちからなされたものか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 手軽に栽培ができて、同時に町の人々を愉快にするような花を求めたところ、ちひろの一言で理想的な花の存在を忘れていたことに気が、慌てて落ち着かない気持ち。

イ 行き詰まってもどこかに名案があるはずだと孫と共に考えていたところ、木戸さんの家がない花が町興しにちょうどあつらえ向きだと気が、木戸さんを見返した気持ち。

ウ 知識と手間と費用をかけずに花で町を満たすという厳しい条件で困り果てていたところ、身近に条件に合う花が見つかったことで難問が解決し、安心して緊張が緩む気持ち。

エ 町中に花を咲かせることができても人々に印象付けられなければ意味がないと思っていたところ、人が自然と目にすることができそうな花を発見し、期待が強まる気持ち。

〔問5〕本文中の表現や登場人物の心情を説明したものとして、最も適切

なもの次のうちより選べ。

ア ちひろがおじいちゃんと木戸さんの家に向かうとき、公園で女の子が寂しそうに手を振っていた。その女の子の暗い表情は、このあとちひろとおじいちゃんが木戸さんの家で経験する試練を暗示している。

イ 木戸さんと話しているおじいちゃんの会話には、「……」という表現が繰り返し用いられている。これは木戸さんのきつい言葉によって、おじいちゃんが次第に自信をなくしていく様子を表している。

ウ ちひろはおじいちゃんの地域興しの計画に付き合いながらも、初めはその実現に懐疑的であった。しかし、おじいちゃんと話を進めていくにつれて、町の明るい様子が想像できて心がはずんできている。

エ おじいちゃんとちひろが楽しそうに調べ物をしているので、おばあちゃんは仲間に入れず寂しい思いをしている。しかし、おじいちゃんの生き生きとした姿がうれしくて、陰ながら応援したいと思っている。

次の文章1と文章2を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

#### 文章1

一〇〇〇億トンの石油があるとして、私が一〇〇億トン使えば、私の次に来る人には九〇〇億トンしか使う可能性がない。私は他人の可能性を狭めるという形で他人に危害を及ぼすことなく石油を使うことができる。だから自由主義の原則に他者危害排除の原則が含まれる以上は、私が他者の権利を侵害しないで石油を使うことができる。ところが実際には、人類の歴史のなかでは、1%にもならない近代—現代人が化石燃料を使いきってしまう。未来世代から、化石燃料を使う可能性を奪ってしまう。これは現在世代の未来世代に対する一種の犯罪である。

環境倫理学の、第二の特徴は世代間関係の重視、あるいは未来の人間の生存権の保証という思想である。権利の拡張という問題を別の角度から見ると、<sup>(1)</sup>倫理的決定システムの時間構造の問題となる。環境や資源の問題の加害者は現在世代である。その被害者は未来世代である。

「世代間倫理」(ハンス・ヨナス)が存在しないならば、環境問題は解決しない。ところが、近代社会の作り上げた倫理的決定システムは「相互性」を特徴としている。「私が他人に認めてもよいと思う権利を自分が持つことに満足しなくてはならない」(ホッブズ)、「他の人も同じことをする」という想定のもとに正義の規則に従うことを表明する(ヒューム)、「汝の意志の格律が普遍的な立法の原理となるように行為せよ」(カント)——これらの言葉は人格と人格、市民と市民との間の「相互性」(互恵性)が倫理の原型であることを告げている。

ところがこの人格間の相互性は、現実にはつねに「現在の同意」に、現在の世代内での相互性に帰着する。たとえば土地の所有権の争いが起

こるとする。双方が、先代とか先々代の古い証文を持ち出すだろう。当然どの証文が有効かという争いになる。その争いは、現在の証文によってしか決められない。だから、結局は過去の問題が争いの的になっても、現在の証拠、現在の証人が決め手になる。近代的な決定システムは、現在性というあり方に向けて完成しつつある。

(中略)

人類は近代化によって、「過去世代にはもう遠慮はしませんよ」という文化をつくり上げた。それが実は、「未来世代にも責任を負いません」という反面を含んでいる。つまり封建倫理は単に古い世代の支配だというのは、近代主義者の偏見であって、封建倫理は未来世代のための倫理でもあったのだ。「家」という観念には、未来世代の繁栄を願う気持ちも含まれていた。

近代主義が進歩の風をふかしている間は、未来世代と利害が一致している建前<sup>たてまえ</sup>だった。「未来世代はぼくたちよりもっとずっと幸せになれる」という信念が進歩主義であるからだ。進歩主義は、自分で未来世代の生存条件を悪くしておいて、未来世代が自分より繁栄すると信じているのだから、ひどい嘘<sup>うそ</sup>つきである。先祖の遺産を浪費してしまつて、あとの世代にはなにも残さなくせに、おれは子孫のために自動車を発明してやったなどと得意がっているのが現代文化である。

たとえば放射線の廃棄物を未来世代に残す。決定システムが現在性をもっているから、そのシステムのなかでは環境汚染の被害者となるかもしれない未来世代からの同意を取り付けることができる。地球の生態系が数千万年をかけて蓄積した太陽熱エネルギーをわずか数百年の世代が使い果たしたとしても、未来世代にはそれを阻止すべく相互性を発揮することができない。すなわち相互性の倫理には、現在世代の未来世代に対するエゴイズムをチェックするシステムが内蔵されていない。

近代的な決定システムは、過去に対しても犯罪をおかすことがある。良い伝統を破壊する。文化の遺産継承を勝手に中断したり、過去の人物に汚名を着せたりする。古代のいちばん古い倫理から最後の封建主義までは、すべて伝統主義という性格をもっていた。すなわち<sup>2)</sup>意志決定のシステムが通時的だった。それが近代化によって共時化されてしまった。

約束、契約、投票、訴訟、立法というような人間相互の間の拘束力を生み出すような有効な決定は共時構造のなかにある。通時構造は、そこをほみ出したイデオロギーの領域に追いやられる。すなわち伝統と過去に忠実であろうとする保守主義と未来を重視し進歩の理念に忠実であろうとする進歩主義との対立が、近代的なシステムの補完的システムとして生まれる。

ところが、環境を不可逆的に汚染し、有限な資源を使い果たすという現代文化のもつ体質は、近代人の考えた「進歩」という歴史像が絵に描いた餅にすぎないことを告げている。現在が未来を食いつぶしている。それなのに現代人の多くが、人類は相変わらず進歩の坂道を登り続けていると信じている。現代は進歩が虚偽と欺瞞<sup>キママン</sup>になっている時代なのである。<sup>3)</sup>進歩という理念は、決定構造論の問題としては、通時的決定が共時的決定に転換した近代に、その共時性を補う通時性として導入されてきたものである。それは①知識、技術、生産の不可逆的な増大、②未来はつねに「よりよい」ものであるという楽観、③進歩主義対保守主義という政治的選択肢を提供した。政治や文化の領域では、いつも保守主義と進歩主義が綱引きをする。しかし問題は過去か未来か、どちらに忠誠を誓うかではない。時間を通じて変化する歴史の意味と構造そのものが、環境と資源という問題によって変わってしまった。

化石エネルギーを利用する限り、必ず地球生態系の破壊が進行する。

埋蔵資源の使い果たし、現存する種の絶滅、不可逆的な砂漠化の進行、森林の破壊等々、これらは現在世代による未来世代の生存条件の部分的な破壊であり、時間軸にそって行なわれる大量殺戮<sup>キョウリク</sup>である。

有限な埋蔵資源に依存するような生存条件、たとえばエネルギー戦略は、未来世代の生存可能性を破壊する。倫理的に許容可能な形態は、太陽エネルギーを用いた資源の循環的な使用ということになる。もしも世界の人口が定常化するという未来像が正しいとするなら、定常化時代の文化は資源の循環的使用という構造的な特色をもたざるをえないだろう。

資源と環境に関して、いかなる世代も未来世代の生存可能性を一方的に制約する権限をもたない。未来世代に廃棄物の処理を強制してはならない。未来世代に現在世代と同じだけの化石燃料の在庫を残さなければならぬ。すると循環的に利用できる条件内で、エネルギーと資源を利用しなければならぬという結論になる。

近代倫理の純粋化されたものである生命倫理学では、基本概念である生命の質は徹底的に現在という時間に定位している。痛い、痛くないかという現在の感覚が、価値判断の原点なのである。環境倫理学は、未来への責任(ヨナス、責任の倫理)を倫理的な原理に導入する。未来の他者の迷惑を考慮して、その生存条件を保証しなければならない。

(加藤尚武「環境倫理学のすすめ」による)

## 文章 2

地球のキャパシティの有限性は、現在世代だけで地球を破壊したり、地球の資源を食いつくしてもいいのかという道義的責任を問うことにもなる。

一九九二年にリオデジャネイロで開催された地球サミットでは、世代間倫理にかかわって、「開発の権利は、現在及び将来の世代の開発及び

環境上の必要性を公平に充たすことができるように行使されなければならぬ」(環境と開発に関する国連会議「リオ宣言」)、「私たちは……、この惑星および現在と未来の人々を救うためには、多様性、連帯、公正および自由に対する限界、賢明、配慮および尊重の基礎を確立する倫理に根ざした新しい文明の創造が必要である」(NGO会議「リオ宣言」)と、述べられている。また、環境基本法第三条「環境の恵沢の享受と継承」でも、「現在及び将来の世代の人間が健全で恵み豊かな環境の恵沢を享受する」というかたちで、世代間倫理にかかわる記述がなされている。

(4) 世代間倫理は、将来世代が地球資源や良き地球環境を享受するため、現在世代のはたすべき義務や将来世代がそのような権利をもつていくことの基礎づけをおこなおうとするものである。これは、地球環境の危機的状況が出現してくるなかで、人類の存続の必要を倫理的側面からいかに根拠づけるかという試みにほかならない。

世代間倫理にかんして、J・ファインバーク (Joel Feinberg) が論文「動物と生まれざる世代のさまざまな権利」を書いたのは、一九七四年のことである。そのなかで、かれは、権利概念を動物にまで拡張することには反対しながらも、人類の「生まれざる世代」(＝将来世代)にまで拡張することにかんしては肯定的に論じた。ファインバークの主張は、人類の将来世代が現在のわれわれと同じような関心や価値観をもち、「良き生活」の概念を共有しているかどうかかわからないが、「住宅空間にも、豊かな土壌にも、新鮮な大気にも、その他いろいろなものにも、一種のインタレストを持っている」ことだけは確かであるということであった。ファインバークは、将来世代の権利の根拠づけを、現在世代との共通のインタレストをもつことのうちに見ようとするのである。

「未来の世代の人間が、確かに我われに対して持っているさまざまな権利は、条件付きの権利なのである。彼らが現実の存在者としてこの世に現れたときに(もちろん彼らが出現すると仮定した上での話だが)確かに彼らのものとされる筈のさまざまなインタレストが、いわば声を大にして、現在の時点で起こり得る侵害から守ってくれ、と叫んでいるのである。……とにかく未来の世代に帰属すべきさまざまなインタレストがあり、そこには自ずとそのインタレストの保護を求める彼らなりの一種の権利も生ずる。だからといって、こういう未来のインタレストが如何に冒涇されようとも、なにしろ彼らがこの世にまだ実在しないのであれば、誰も彼らになり代わって文句の言いようがない。……彼らのさまざまな権利を認めることは、危機に瀕している種(我われ人類を含めて)に報いる我われの最小限の仕事なのである。」

(岩佐茂「環境保護の思想」による)

〔注〕第二の特徴——筆者は本文より前の部分で、第一の特徴として、人間だけでなく生物の種、生態系、景観などにも生存の権利があるので、勝手にそれを否定してはならないという、自然の生存権の問題を挙げている。

ハンス・ヨナス、ホップズ、ヒューム、カント  
——いずれも西欧の哲学者。

欺瞞——人目をあざむき、だますこと。

殺戮——多くの人を殺すこと。

恵沢——恩恵を受けること。

J・ファインバーク——アメリカの物理学者。

インタレスト——興味、関心。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 倫理的決定システムの時間構造の問題とあるが、ここで筆者が

注目しているのはどのようなことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 近代社会の倫理的決定システムは相互性が特徴だが、相互性だけでは現代から未来にかけて生じる、環境や資源の諸問題を解決することが不可能になっているということ。

イ 世代間倫理という観点で争いごとの解決を図る場合、近代的な倫理的決定システムでは現代の証拠だけでなく、過去や未来それぞれ相互に証拠が必要になるということ。

ウ 環境倫理学では現在世代と未来世代の間の相互性を満たす必要があるのに、近代社会では現在世代内の相互性だけが、倫理的決定システムの基本となっているということ。

エ 未来の人間の生存権を保証しようとする場合、近代社会の倫理的決定システムによって、現代の人々は相互に環境問題を解決しようとする意識が重要になるということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 意志決定のシステムが通時的だった。それが近代化によって共時

化されてしまった。とあるが、どうということか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 封建時代は、自分の子孫の末永い繁栄を願うことを重視して行動を決定していたが、近代主義の時代は、未来の人はもつと幸福になるという夢をかなえるための決定システムへと変わってきたということ。

イ 古代の人々は何をするにも伝統を重んじ、過去の世代に遠慮しながら生活していたが、近代の人々の意識は、子孫のためには現在の技術開発を競い合うという決定システムへと変わってきたということ。

ウ かつては伝統と過去を忠実に受け継ぐことが人々にとっては重要で、変化を求めることをしなかったが、近代主義では未来を重視し、進歩の理念を忠実に実現する決定システムへと変わってきたということ。

エ 近代以前は伝統を引き継いで、次の世代へ伝えるという観点で物事を決定していたが、近代社会では過去や未来を切り離し、現代の人々の利益を中心に考える決定システムへと変わってきたということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 進歩という理念とあるが、このことについて筆者の考えをまとめ

めたものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 近代主義のもとで、未来は現代よりよくなると信じて、現代において知識や技術、生産を拡大させてきたが、それらの成果が遠い未来の社会に直結する確信はなく、未来のために現代があるという考えは思い上がりである。
- イ 過去から未来へ向けて流れる時間軸に沿って、つねに未来は過去よりもよくなるとの考えは近代化の原動力となってきたが、一方で保守主義との政治的な対立が起きたことで、歴史の意味と構造そのものが変わるようになった。
- ウ 現代を生きている人々が自らの生活をよりよくするための考えであり、不可逆的な環境破壊さえもたらすことになったが、未来世代に対して責任を負うことまでは考えていないので、子孫の幸福を願うということは建前である。
- エ 伝統に忠実な保守主義に対し、発展を続けることは現代人だけでなく未来の人の幸福にもつながると考えるが、実際は未来の人が幸福になるための環境や資源が維持できそうもなく、よりよい未来の実現はまやかしになった。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 世代間倫理は、将来世代が地球資源や良き地球環境を享受するために、

現在世代のはたすべき義務や将来世代がそのような権利をもっていることの基礎づけをおこなおうとするものである。とあるが、世代間倫理ではどのようなことを根拠にして将来世代の権利を認めようとしているのか。文章1の内容もふまえて、最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア わたしたちは現代の環境のもとで近代的な生活をしてきているが、まだ見ぬ未来の人たちであっても、わたしたちが味わった生活と同程度の生活が保証されるべきだと考えること。
- イ 現代に生きているわたしたちは、過去に祖先の人たちから幸福な生活を祈願されてきた歴史があるのだから、わたしたちも未来の子孫たちの幸福を願う必要があると考えること。
- ウ わたしたちは進歩主義の理念にしたがって現代の繁栄を実現してきたのだから、未来の人たちも、わたしたちの時代より豊かな生活を実現するのは可能なはずだと考えること。
- エ 地球の資源や環境をわたしたちは近代から現代まで使い果たしてきたが、これらは有限で、未来の人たちが自らの生活のためにその残量に関心をもつのは当然だと考えること。

(5)

〔問5〕

こういう未来のインタレストが如何に冒瀆ぼうとくされようとも、なにしろ彼らがこの世にまだ実在しないのであれば、誰も彼らになり代わって文句の言いようがない。とあるが、このことから現在世代は将来世代の不満を代弁できないことが分かる。そのようなことが文章1でも読み取れる箇所を五十字以内で探し、最初と最後の五字を答えよ。

〔問6〕

文章1と文章2を読んだ生徒たちが、未来の様子について話をしている。文章1と文章2の主張や生徒A～Eの考えを考慮しながら、現代に生きるわたしたちが未来世代に果たすべき責任について、あなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。やなどもそれぞれ字数に数えよ。

生徒A 未来はロボットやAIが普及して、今よりもっと進歩した映画で見ると世界が実現すると思っているけど、実際はそうではなく、未来の人の生活はそれほど快適ではないのかな。

生徒B 進歩が化石エネルギーに頼っている以上は、いつかは資源がなくなり、進歩どころか後退するかもしれない。電気も作れなくなるから、でも遠い先のことだから考えなかつたけどね。

生徒C そんなに先のことなら、そのころの人たちが何か解決しているんじゃないかな。大昔の人が今の情報化社会を予期できなかったように、未来は現代人の想像以上に進歩していると思うよ。

生徒D でも、昔の人の生活では地球環境なんて考えることはなかつたと思うよ。現代人の影響で未来に向けての環境悪化が分かってきた以上、何もしないわけにはいかないんじゃない。

生徒E そうするともっと省エネの生活をしなければならぬよ。まだこの世にいない人たちのために、今いる人たちが、例えば快適さを我慢する、ということが未来への責任を果たすことなのかなあ。





むかし思ひ出で顔に、風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいみじう似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。

（この「草の花は」の中に薄を入れないのは、とても奇妙だと、人は言うようだ。秋の野を通じてのおもしろさというものは、まさに薄にこそあるのだ。穂先が蘇芳色で、たいへん濃いのが、朝霧に濡れてうちなびいているのは、これほどすばらしいものがほかにあるうか。しかし秋の終わりは、全く見るべき所がない。いろいろな色に乱れ咲いていた花があとかたもなく散り果てた後に、冬の末まで、頭がまっ白く乱れ広がっているのも知らないで、昔を思い出しているような顔つきで風にたなびいてゆらゆら立っているのは、人間にとってもよく似ている。こういうふうになぞらえる気持ちがあるので、その点が特にしみじみと気の毒に思われるのである。〕

清少納言は薄を加えなくなかった。なぜなら、秋のさ中の、茶紅色の穂先が出たばかりの（これが九月）風姿はよいが、秋の果てに白い頭をしてふらふら立ってうらぶれた人生を思い出させる（これが十月）姿態がたまらなく嫌だったのである。要するに十月の、人生の果てを彼女は嫌ったのである。

(2) これらの実例から察すると、清少納言が紅葉を全く採り上げていないのは、意識的に触れていないと判断するほかないであろう。それは彼女個人の、うらぶれた人生を象徴するものとして紅葉を見立てたからなのか、あるいは、栄光の定子サロンへの懐古のせいか、あるいは、この秋の忠誠心かもしれない。秋はわびしい、これを忠実に伝えようとする作者の忠誠心かもしれない。秋はわびしい、これを清少納言が好まなかったことはよくわかる。だが同じ秋の風物でも、紅葉はいかにも華麗と言つてよい。それを全く書かない、紅葉は散るといふことを嫌ったせいなの

か、清少納言個人の好みとみるにせよ、定子サロンの意向だとみるにせよ、枕草子の特異な性格と考えていいであろう。

これに対して春二、三月の桜はどうだろう。春二、三月の計八例のうち、桜が彩られているのは二つで、そのうちの二つ（積善寺供養の段）は造花であり、もう一つ（清涼殿の丑寅のすみの段）は有名な、青磁の瓶にさした桜——君をし見ればもの思ひもなしと歌った——である。この後者こそ、まことに中関白家全盛の栄華を誇る花であった。それはまことに枕草子にふさわしい。

しかし、桜はこの一例だけである、むしろ梅の方に彼女は好意を持っていた。というのは、満開の桜ならば彼女の鑑賞に堪えよう、けれども桜は散る、これが彼女の気に入らなかったのではないか。自身が心に悲哀感を持ち、それを表現したくない場合、悲哀感を象徴する「もの」は採り上げないのが人情である。清少納言はそういう性格だった。

思うに、この桜と紅葉への清少納言の姿勢は、平安朝人の伝統的好尚——古今和歌集以来の、桜散る、紅葉散る、とは異質な感性である。古今和歌集が、春歌下巻、秋歌下巻に、この二つを連綿と並べて人生のうつろいやすさ、悲しみを託した、平安朝人の心の陰を、清少納言ははっきり拒否したのである。(4) 枕草子は、このように、平安文学の流れの中でという、貴族文学の伝統の中ではあるが、通例の平安朝人の感性とは異質なのである。

清少納言が一番好きな月は五月だった。旧暦の五月、即ち、ほぼ新暦の六月は中旬から一カ月余、梅雨に入る。雨量の増加と共に、一〇%近く湿度も増す。するとすべてが伝わり易くなり、人の感情も流れやすくなるのであろう。枕草子で、五月を採り上げた段は十ある。そのほか、部分的に五月の風物を話題にしたものを含めれば十二になる。

五月こそ世に知らずなまめかしきものなりけれ。(二二一段)

〈五月の行幸は、ほかに比べるものもなく優雅なものであった。〉

節は五月にしく月はなし。(三九段)

〈節日は、五月の節日に及ぶ月はない。〉

このように月を断言的に言い切るのは五月だけである。それでは、清少納言は五月の何が気に入ったのだろうか。「なまめかし」とは何だろうか。

この五月のよさは、彼女にとつて、長雨のしつとりと落ち着いた風情であり、山里・野原、そして水辺に青々と生育し、かおり高く匂う草々であった。そして雨中に鳴くほととぎす、さらには人のたきしめた香、そして宮廷や民間の節句の行事が曇り空の下で営まれる。

有名な段「五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし(五月のころなどに山里に出歩くのはたいへんおもしろい。)」では、草と水が一面に青く見渡されるが、その上には草が生い茂っているところでも、まっすぐ乗り入れると、下の水が、従者などが歩むとほとぼしりあがるのがおもしろい、とは、動きを伴った視覚。水辺のしつとりとしたさまが好きな彼女は、補二七段で、池ある庭を称揚する。

池ある所の五月長雨の頃こそいとあはれなれ。菖蒲・菰など生ひこり(密集)て、水もみどりなるに、庭もひとつ色に見えわたりて、曇りたる空をつくづくとながめくらしたるは、いみじうこそあはれなれ。いつも、すべて、池ある所はあはれにをかし。

〈池がある所の五月の長雨のころは、たいへんしみじみとした感じがするものだ。池には菖蒲や菰などが一面に生い茂って、水も水草で緑色になっているので、池も庭も同じ色にずっと広く見えている、そんな所で曇っている空をつく

づく物思いにふけりながら一日中眺め暮しているのは、たいへんしみじみと心に迫るものがある。いつも、総じて、池のある場所は情趣に満ちていておもしろい。〉

彼女の好みからすれば当然である。この素材の取り合わせを見てほしい。この短文の中で、こんな具合にいいと採り上げて場面を作り上げるのは、彼女のみごとな観察力と直観力だと思う。

(高橋和夫「日本文学と気象」による)

〔注〕紅葉——楓の木の葉が赤く色づいたもの。

蘇芳色——黒みを帯びた赤色。

定子サロン——宮中における、一条天皇の後定子と、彼女に仕えていた清少納言他、女性たちの集まりを意味する。「枕草子」が成立したとされる頃には、定子は亡くなっていた。

君をし見ればもの思ひもなし——桜の花のような君さえ見れば、すべての悩みはなくなる。

中関白家——定子の家系。

行幸——天皇が外出すること。

節日——季節の変わり目などに祝祭を行う日。

〔間1〕<sup>(1)</sup> 十月ばかりに、木立おほかる所の庭は、いとめでたし。とあるが、清少納言がこのように言うのはなぜか。その理由を二十字以内で書け。

〔問2〕<sup>(2)</sup> これらの实例から察するとあるが、筆者は实例からどのような考察をしてきたのか。その考えをまとめたものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 清少納言は紅葉を風流で華麗なものとしてとらえている。それは宮中での輝ける誉れの時間を象徴するものである。しかし、月並みなありふれたものに例えられてしまうことはあまり好まないようだ。

イ 清少納言はもともと晩秋が嫌いなので、紅葉にも興味はない。しかし、秋には人生を振り返らせる趣もある。昔の記憶を呼び覚ます秋の風物は、どんな思い出があるかと大切なものとしてとらえている。

ウ 清少納言は紅葉の木である楓の存在は知っている。また、秋には木の葉の色が変わって落ちるということを嫌っているわけではない。しかし、薄の例から落ちぶれた人生を思わせるものは嫌いなようだ。

エ 清少納言は、楓の芽ぶく葉の様子を好んでいる。季節ごとに植物が色を変えるのも美しいと感じている。しかし、白という色は自然の中において、存在感や魅力があまりないものとしてとらえている。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 鑑賞に堪えよう<sup>(3)</sup>とあるが、ここでの意味として、最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 見て楽しむには我慢が必要かもしれない。
- イ 美しさを味わうだけの価値があるだろう。
- ウ 周囲に流されず自分の感覚を維持できる。
- エ 自然に対する親しみを感じられるはずだ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 枕草子は、このように、平安文学の流れの中でという、貴族文学の伝統の中ではあるが、通例の平安朝人の感性とは異質なのである。とあるが、本文から読み取れる清少納言の感性とはどのようなものか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 清少納言は自分が栄光を失う悲哀を経験しているので、繁栄しているものの華やかさが失われていく姿は見たくないというもの。

イ 清少納言はさびしがりやで、動きがあまりにぎやかな状態の中でこそ、人々の生きざまが伝わるものであると感じているというもの。

ウ 清少納言は「散る」という言葉に敏感に反応し、そこから連想される出来事は隠さずはつきりと表現してしまいたいというもの。

エ 清少納言は受け継がれてきたものを大切にしようという気持ちがあるが、表現や考え方が型にはまるのは好まないというもの。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 彼女のみごとな観察力と直観力とあるが、補二七段の古文において清少納言の観察力と直観力が読み取れる箇所として、最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 池ある所の五月長雨の頃こそいとあはれなれ
- イ 水もみどりなるに、庭もひとつ色に見えわたりて
- ウ 曇りたる空をつくづくとながめくらしたるは
- エ いつも、すべて、池ある所はあはれにをかし

4  
青

園

五  
日